

# 恐るべき良心

## ——「ウィリアム・ウィルソン」の寓意について

平野幸彦

エドガー・アラン・ポウ (1809-49) 中期の代表作「ウィリアム・ウィルソン」“William Wilson” (初出1839) の批評は、解釈の基本となる、ある前提に対する態度によって、大きく2つに分けられる。その前提とは、ウィリアム・ウィルソンなる人物は1人、つまり語り手以外には存在せず、分身とおぼしきは、実際は語り手の空想の産物であるというもの。そして態度とは、それに立脚するか、それとも度外視するかというものだ。ここではかりに、前者の態度をとるものを心理的批評、後者の態度をとるものを寓意的批評と呼ぶことにしよう。

まず心理的批評から検討してみたい。たとえばパトリック・F・クインは、「主人公自身のことばを除くと、第2のウィリアム・ウィルソンが存在する証拠はない」と主張し、「分身は精神の客体化 (mental projection) にすぎない」と断言している (221)。また、それから四半世紀を経て、ヴァレンタイン・C・ハブズも同じような趣旨のことを述べている——「第2のウィリアム・ウィルソンは……第1のウィルソンの精神の外には存在しない」(73)<sup>(1)</sup>。

しかしこの種の批評は、その根本に大きな問題点を抱えている。と言うのも、テキスト上の証拠から、分身つまり第2のウィルソンの実在性は否定できないように思われるからだ。(以下、本文中では、混乱を避けるため、語り手のウィリアム・ウィルソンは「語り手」、第2のウィリアム・ウィルソンはたんに「ウィルソン」と記す。)

1つ目の証拠として、上級生の間に流れたうわさの存在が挙げられる。語り手が思うに、ウィルソンがそのふるまいに示す親愛の情と、同じ氏名に同じ入学日といった事情があいまって、語り手とウィルソンは兄弟であるといううわさが流れたというのだ (432)<sup>(2)</sup>。もしウィルソンが語り手の幻覚にすぎなかったら、上級生の目にその姿が映るはずはなく、したがってこんな風説が流れることもなかっただろう。もっとも、ともすると奇妙に感じられるのは、学友たちが、このうわさのおそらくもとなつた両者の間のさまざまな類似を話題にもしなければ、気がついていそぶりすら見せないことだ (434)。そもそも彼らは、2人の間に対抗意識が存在することすら、わかっていなかったらしいと語り手は言う (432)。そして前出ハブズは、この点をとらえてウィルソンが実在しない根拠としている (73)。しかしながらテキストを注意深く読めば、必ずしもそう取るにはおよばないことがわかるだろう。なぜなら、上述のうわさに関しては、学友たちも気づいており、話題にのぼしていたと、ちゃんと書いてあるからだ (「([ウィルソンとわたしの間の] 関係の問題を除き……)」[434, 傍点筆者])。類似や対抗意識については、彼らは気づいていたけれども、知らんぷりをしていたのだろう。なにせ語り手はガキ大将だったのだ (「自分よりさほど年長でないすべての生徒に対し支配力」をふるっていた [431])。あるいは、ウィ

ルソンがその性格にふさわしく、超自然的な力を発揮していたのかもしれない（そのへんをポウは、おそらく故意に曖昧にしている）<sup>(3)</sup>。いずれにせよ、ウィルソンの実在性を否定する根拠としては不十分だろう。

第2の証拠は外套のエピソードである。オックスフォードでのトランプ賭博で、ウィルソンとおぼしき闖入者にかさまを暴露された語り手は、屈辱のうちに現場を去る羽目になるが、そのさい、部屋の主人から忘れ物だといって床に落ちていた外套を手渡される。それはまさしく自分のとそっくりの外套だったが、しかしそのとき、語り手はすでに自分の腕に掛けていた。思えば、闖入者は外套を着ており、ほかのメンバーは誰も着ていなかった。とすれば、問題の外套は闖入者のものだと考えざるを得ない(444)。このエピソードは、ウィルソンと語り手の同一性を強調する一方、前者の実在を証立てるものだ。

さらにもう1つ指摘するならば、語り手がイートン校でのできごとの後、しばらくの間行なった調査の結果、ウィルソンが、急な家庭の事情という理由で、語り手が逐電した日の午後にブランズビー校を退学していた事実が知れたこと(439-40)も、物語のすべてを語り手の空想の産物と見なさないかぎり、ウィルソンの客観的存在を裏書きする証拠となるだろう。

ゆえに、ウィルソンの実在を語り手の空想の産物として否定してしまう解釈の仕方は、せっかくの（ツヴェタン・トドロフの用語を借りれば）「幻想」的な（この点については後で説明する）作品を、はなから単なる「怪奇」のジャンルに回収してしまうという意味でつまらないだけでなく、テキスト的な根拠からも妥当でないという結論になる<sup>(4)</sup>。

それでは寓意的解釈はどうか。その妥当性の検討に入る前に、まず寓意を含んだ物語、つまり「アレゴリー」とはいかなるものを指すか、確認しておこう。もっともこの「アレゴリー」なる用語、論者により意味するところがさまざまに異なり、容易にはまとめられないのだが、ここではトドロフの定義(98)をさらに簡潔に言い換えて、「表の、つまり字義的な意味の背後に、作者が意図的に、比喩的な意味を含意している物語」としておきたい。そしてアレゴリーにおいては、字義的に語られることがらの現実みは、比較的度外視される。

ところでいまの定義で肝心なのは、「作者が意図的に、比喩的な意味を含意している」というくだりである。トドロフは、文学テキストがアレゴリーとして読まれるためには、「二重の意味」つまり字義的な意味のほかに比喩的な意味が存在することが「作品内に明瞭な方法で示され」ていなければならないと述べている(98)。

では「ウィリアム・ウィルソン」に、そうした作者による指示は存在するだろうか。じつはポウは、作品冒頭につきのようなエピグラフを掲げている。

What say of it? what say of CONSCIENCE grim,  
That spectre in my path?

*Chamberlaine's Pharronida.* (426)

「ウィリアム・ウィルソン」が最初に発表されたのは、年刊誌『ギフト』の1840年版(1839)であった。その後作者の生前では、『バートンズ・ジェントルマンズ・マガジン』1839年

10月号、短篇集『グロテスクとアラベスクの物語』(1840)、『ブロードウェイ・ジャーナル』1845年8月30日号に再録されている。テキストにはそのつど改訂の筆が入れられているが、全体の解釈を左右するほどの大きな変更は見られない。エピグラフも初出時から付されており、最終版にいたるまでほぼ不変である。つまり、「ウィリアム・ウィルソン」を読む者は、必ずこのエピグラフを目にしてきたわけだ。ならば、ポウ自身、作品の外部にあるものと見なすこともあったエピグラフだが、ここでは「作品内」の要素と考えてよいのではないか<sup>(5)</sup>。しかも、ウィリアム・チェンバレン William Chamberlayne 作『ファロニダ』*Pharonnida* (1659)——ポウは誤って綴っている——からの引用とされているこの詩行は、実際はポウの創作らしい。そのような典拠に欠ける一節であるにもかかわらず、いずれの版からも省略されることなく、つねに冒頭に掲げられてきたという事実は、逆説的に、このエピグラフが作品の本質的な一部であることを示しているだろう。

ではこのエピグラフは、いったいどんなメッセージを読者に伝えているか。それは言うまでもなく、物語の中に登場する分身が語り手の「良心」の化身であるということにちがいない<sup>(6)</sup>。なるほどこれだけ単独に取り出しては一目瞭然というわけにはいかないが、本文を読んでから振り返ってみれば、その趣旨に疑問の余地はないだろう。要するに、「ウィリアム・ウィルソン」という作品が「良心についてのアレゴリー」であることを暗示しているのだ<sup>(7)</sup>。

しかし「ウィリアム・ウィルソン」をアレゴリーだと結論づけてしまう前に、片づけておかなければならない問題がある。それは語り手が信用できるかどうかという問題だ。

ポウは物語に入る前に、語り手につきのような疑問を口にさせる——「じつはわたしはこれまで夢の中で生きてきたのだろうか？」そして引き続き、以下のような自己紹介をさせている。

I am the descendant of a race whose imaginative and easily excitable temperament has at all times rendered them remarkable; and, in my earliest infancy, I gave evidence of having fully inherited the family character. As I advanced in years it was more strongly developed ... (427)

「想像力豊かで興奮しやすい気質」——じつは語り手のこのような性格的特徴こそ、先に検討した分身の存在を疑問視する立場を裏で支える根拠にほかならない。語り手は精神的に不安定——ありていに言えば狂気——で、幻覚を見たというわけだ。しかもこの語り手は、自らその説の正しさを裏書きするかのよう、深夜のブランズビー校でウィルソンの寝顔を目撃した後、しばらくたってそのときの記憶が薄らいでゆくさまを、こう描写している。

I could now find room to doubt the evidence of my senses; and seldom called up the subject at all but with wonder at the extent of human credulity, and a smile at the vivid force of the imagination which I hereditarily possessed. (438)

しかしながら、こうした信頼性を揺るがしかねないコメントにもかかわらず、筆者は

「ウィリアム・ウィルソン」の語り手は信ずるに足ると考える。トレイシー・ウェアは、この問題に関連して、冒頭の語り手の予弁的なコメントと、のちに語られるできごととの間には、なんらつながりが見いだせないと主張している(44-45)。もしそうなら、これは語り手の狂気を暗示する重要なヒントとなるが、よくよく考えてみれば、必ずしも辻褄が合わないわけではない<sup>(8)</sup>。

私見では、このような語り手の性格づけは、少なくともこの作品においては、分身の実在を否定する可能性を導入する——つまり、われわれが生きている世界の法則を温存することによって現実みを強調する——ために行なわれたのではなく、作品全体をトドロフの言う「幻想」にできるかぎり(と言うのは、他のポウの作品——たとえば「アッシャー家の崩壊」“The Fall of the House of Usher” (1839)——とちがい、「ウィリアム・ウィルソン」は究極的にはアレゴリーであるからだ)近づけ、ことばの本来の意味での「サスペンス」——宙ぶらりん状態——を結末ぎりぎりまで持続させるという、いわば「効果」を得るための手段であったのだ<sup>(9)</sup>。畢竟、「ウィリアム・ウィルソン」の「わたし」は、決して「信頼できない語り手」ではない。あくまでも「信頼しにくい語り手」にとどまるのである。

以上の考察から、「ウィリアム・ウィルソン」という作品は、第一義的にはアレゴリーとして読まれるべきだと結論される<sup>(10)</sup>。そしてアレゴリーであるがゆえに、このテキストは、そこで語られることがらの現実みを度外視することを読者に要求する。ところがそのアレゴリー性は、冒頭のエピグラフ(あとから振り返ってみないかぎり、その趣旨は判然としない)と(これまたいささか曖昧な)結末の場面によってしか示されない<sup>(11)</sup>。しかも「信頼しにくい」語り手や、プロットに埋めこまれたもろもろの仕掛けのために、読者の判断はえんえんと留保を迫られる。「ウィリアム・ウィルソン」は、言わばかぎりなく「幻想」に近いアレゴリーなのだ<sup>(12)</sup>。

ところで「ウィリアム・ウィルソン」をアレゴリーとして読む場合、ウィルソンを(少なくとも第一義的には)語り手の良心の化身と解することには、先述したように、まず疑問の余地はないだろう。しかしながら、物語全体のメッセージとなると、ことはそれほど明瞭でないように思われる。語り手とその良心との間の関係が、いったいどうだということか? 欲望に駆られる男が、おのれの良心の忠告に耳を貸そうとしないがために破滅する物語と読むのが、この作品のもっともオーソドックスな解釈のようだが、はたしてそれで問題なかろうか?<sup>(13)</sup>

この疑問に答えるためには、まず、語り手が自分の体験を物語る動機を確認しなければならない。彼は物語に先立ち、つぎのように述べている。

Death approaches; and the shadow which foreruns him has thrown a softening influence over my spirit. I long, in passing through the dim valley, for the sympathy-I had nearly said for the pity--of my fellow-men. I would fain have them believe that I have been, in some measure, the slave of circumstances beyond human control. I would wish them to seek out for me, in the details I am about to give, some little oasis of *fatality* amid a wilderness of error. I would have them allow

--what they cannot refrain from allowing--that, although temptation may have ere-while existed as great, man was never *thus*, at least, tempted before--certainly, never *thus* fell. And is it therefore that he has never *thus* suffered? (427)

この文章に注目すべきポイントは2つある。ひとつは、語り手が「わが同胞の同情を——もう少しで哀れみをとってしまおうところだった——切望している」こと。もうひとつは、彼らに自分が「人間の力のおよばない状況の奴隷」であったと信じ、過ちだらけの人生に「宿命」が関与していた証拠を見だし、「このような誘惑」を受け、「このような苦しみ」を味わった人間は古今東西1人もいなかったことを認めてもらいたいと言っていることだ。「苦しみ」というのは、作品冒頭の疑問文の連続に示されているように、悪行を尽くした結果、同胞からも見放され、あらゆる希望を失ってしまったことを指すのだろう。では「人間の力のおよばない状況」ないし「宿命」とは何か？ それはひとつには、物語の最初に言及されている、語り手の生まれながらの性向や家庭環境のことだろうが、のちにウィルソンの干渉を「運命の曖昧な警告 (ambiguous monitions of the destiny)」と呼んでいる(428)ことから推察されるように、ウィルソンの出現をも意味しているようだ。とすれば、「誘惑」というのも、ウィルソンが彼に対してしたことの謂だと言わざるを得まい。それにしても「誘惑」とは！ しかしこの表現が意外に思われるのは、語り手がおのれの犯した過ちを自らの責任において引き受け、悔い改めているという前提に立った場合のみの話である。じつは「ウィリアム・ウィルソン」の語り手は、自分に責任があるとは思っていない。彼が悪の道に走ったのは、あくまでも「宿命」のせいなのだ。したがって、その語りに反省の色はほとんど見られない<sup>(4)</sup>。彼はもっぱら読者の「同情」や「哀れみ」を得るために語っているのである。

ここでひとつ興味深いことに気がつく。このように自己責任という観点から見ればきわめて卑怯に映る「ウィリアム・ウィルソン」の語り手だが、にもかかわらず、作品全体の印象から判断するかぎり、作者ポウが彼に対して批判的な態度を取っているようには思えないのだ。もしこの直感がはずれていないとしたら、先に触れたような従来の寓意的解釈は、実情にそぐわなくなるだろう。

なぜそのような印象を受けるのか？ この問いに対する答えを探るべく、語り手とウィルソンのやりとり——それも、「ウィリアム・ウィルソン」を論ずるさいにしばしば言及されるイートン校やオックスフォードのエピソード以外の箇所に見られる彼らのやりとりに注目したい。

語り手は、ブランズビーの寄宿学校で過ごした最初の数年間は、何かというと反抗してくるウィルソンに対し、愛憎相半ばする感情をいだいていた(431-33)。ところが、学校を逃げ出す数か月前になると、ウィルソンの邪魔立てする度合は明らかに減じていたにもかかわらず、それにほぼ反比例して、語り手の憎悪の情は増してゆく。そしてあるときそのことに気がついたらしいウィルソンは、以後語り手を避ける——あるいは避けるふりをする——ようになったというのである(436)。

これはいささか奇妙ではないか。語り手は、何よりも自分の行動に口出しされるのが我慢ならなかったはずである。ならば、干渉されなくなったら、たんに無視してしまえばよいものを、積極的に憎むようになったとはどういうわけか。また、以前はしつこく語り手

に逆らっていたウィルソンが、さらに抵抗を激しくするというのならともかく、退いてしまうというのにも解せない。

しかしこれに類したパターンは、ほかにも見受けられるのである。物語の結末近く、酒に溺れるようになった語り手は、その力を借りて、もうこれ以上奴隷状態には甘んじまいと決意するのだが、そのとき彼は、自分が強く出れば出るほど、ウィルソンのほうは弱くなっていくような気がしたと回想している(446)。さらにクライマックス。ウィルソンの干渉に激怒した語り手は、仮装舞踏会の会場に隣接する控えの間に彼をむりやり引っ張りこむが、ウィルソンは抵抗しようとしな。そして部屋に入ると、語り手に挑まれてしぼしぼ剣を抜くが、あっけなく刺されてしまう(447)。

これらの事例から、いったいどんな「寓意」が読み取れるだろうか。

束縛をきらい、欲望のおもむくまま自由な行動を求める精神の力が強くなれば、それに応じて良心のほうは弱くなると、とりあえずは言えるだろう。ひとことで言うなら、いざというときの良心の頼りなさ。

しかしここには、じつはもうひとつ、がかわっている要素がある。それはポウのお気に入りのテーマである「天邪鬼 (the imp of the perverse)」にほかならない<sup>(1)</sup>。天邪鬼に「駆り立てられて、われわれはすべきでないことを、すべきでないという理由のために、してしまう」(Mabbott 3 : 1220) のだが、この「人間に内在する原始的な行動原理」の関与は、最初の例に明らかだ。つまり、干渉されなくなったからこそ、憎しみを強くしたというわけである。

思うに、良心もまた、天邪鬼と同様、人間精神に内在する「宿命」的な力なのだろう。だからポウは、その犠牲者たる「ウィリアム・ウィルソン」の語り手を断罪しなかったにちがいない<sup>(2)</sup>。

良心というものは、つねに人を悪の道から救う力たりうるとはかぎらない。とりわけ天邪鬼がからんでくると、かえって人を破滅に追いやる一助となる——ポウが良心に「恐るべき (grim)」なる形容を施したゆえんは、まさしくそこにあっただのらう。かくして「ウィリアム・ウィルソン」は、単なる教訓話の域を越え、短篇作家ポウの関心を惹きつけてやまなかった、人間精神の内奥に潜む、理性による制御の効かない不気味な力を探求せんとする一連の作品の系譜に連なるのである。

## 注

- (1) フロイド・ストーヴァルの解釈はひとひねりしてある。彼によれば、語り手がブランドビー博士の寄宿学校で同姓同名の少年に出会ったのは現実のできごとだが、同校を出て以来、前者は後者に会っていない、つまり幻覚を見ているのだという(260)。
- (2) 「ウィリアム・ウィルソン」からの引用、およびテキストに関する情報はマボット版第2巻による(日本語は拙訳。強調は特記しないかぎりポウ)。
- (3) 学友たちがウィルソンの物真似に気づかないのは、語り手にとっても長いこと謎だった。ある箇所では、表面的な模倣を軽んじて精髓だけを完璧に捉えているからだという、(いかにもポウの作中人物らしい) 美学的見地からの説明でおのれを納得させようとしている(435)。しかし読者としては、その理由づけを鵜呑みにする気にはなれないだろう。説得力の乏しさが、か

えてウィルソンの超自然的な力を暗示させる。

- (4) トドロフの幻想文学理論の核心部分については前稿にて略述した(61-62)が、要点のみ繰り返しておく、作中で記述されているできごとが、われわれが生きているこの世界の自然法則で説明できるならば、その作品は「怪奇」(l'étrange〔英語では the uncanny と訳されている〕)のジャンルに、別の法則を導入しなければ説明できない場合は「驚異」(le merveilleux〔the marvelous〕)のジャンルに属することとなる。そして「幻想」(le fantastique〔the fantastic〕)とは、それら2つのジャンルのいずれとも決めかねる(トドロフは「ためらう」ということばを使っている)宙ぶらりん状態のことを言う。出版後30年以上を経て、限界や問題点も指摘されているトドロフの理論だが、それでもある種の幻想文学作品のある種の側面を明らかにするには、いまなお有効な視点を提供していると筆者は確信する。
- (5) ポウはロングフェロー作『バラッドとその他の詩』の書評(1842)で、作品本体の前に置かれる説明的なテキスト(彼は“prefix”と呼んでいる)を、「効果の統一」とあいられないものとして批判している(*Essays and Reviews* 690-91)。
- (6) フロイト的に言えば「超自我(superego)」の化身ということになる。またハブズは、ユングの「影」という概念を引きあいに出している。
- (7) さらに、間接的な証拠にすぎないが、ワシントン・アーヴィング宛書簡の存在もある。この手紙については前稿で詳しく論じたので反復を避けるが、これもまた「ウィリアム・ウィルソン」をアレゴリーとして読む妥当性を支持するものだ。詳しくは平野 65-66を参照。
- (8) 語り手は第2段落でこう語っている——“I would not, if I could, here or to-day, embody a record of my later years of unspeakable misery, and unpardonable crime. This epoch-these later years-took unto themselves a sudden elevation in turpitude, whose origin alone it is my present purpose to assign. Men usually grow base by degrees. From me, in an instant, all virtue dropped bodily as a mantle. From comparatively trivial wickedness I passed, with the stride of a giant, into more than the enormities of an Elah-Gabalus. What chance--what one event brought this evil thing to pass, bear with me while I relate.” (426-27)

ウェアは上掲の文章のうち、“my later years of unspeakable misery, and unpardonable crime . . . took unto themselves a sudden elevation in turpitude”というくだりに注目し、それに対応するできごとがあとに続く物語の中に描かれていないと主張する。しかしこの文句は、筆者には「分身殺害」後の語り手の人生を意味するとしか取りようがないように思われる。つまり、“comparatively trivial wickedness”は分身殺害以前の悪事を、“origin”“chance”“one event”は分身殺害を指すというわけだ。この読み方を否定すべくウェアが持ち出す、結末を語り手の自殺とする解釈はいまいち根拠薄弱なように思われるし、若き日の“caprices”(427)からイートン校での“miserable profligacy”(438)とオックスフォードでの“mad infatuation”(440)を経てヨーロッパやエジプトでの陰謀にいたる(ウェアいわく)「かなりの墮落したできごと」(45)(もっともこれらをさほど悪辣でないと見る論者もいる——Sullivan 254-55を参照)が、“Men usually grow base by degrees”以下のことばと辻褃が合わないという主張は、「以後の年月」の「言語に絶する悲惨」「許しがたい罪」に比べたら物語中で言及される「できごと」の間に見られる悪のレベルアップの度合は取るに足りないと考えれば(つまり一種の緩叙法だと見れば)、そしてそれらの「できごと」が語られるさいに間々見られる悪の程度を強調するがごとき表現は勢いあまっの(あるいは意図的な)誇張法にすぎないと考えれば、論駁することが可能である。

とはいえ、ウェアに公正を期すために付言しておく、心理的批評を排し、「ウィリアム・

ウィルソン」に見られる曖昧性を構造的に把握しようとする彼女の姿勢には、筆者は基本的に賛成である。

- (9) ウィルソンが結末にいたるまで地声で語らないことや素顔を見せないこと（語り手は途中でウィルソンの寝顔——つまり警戒を解いた真の顔とおぼしきもの——を目撃させられるが、彼が実際に何を見たかについては具体的には語られない）も、まずは同じような意図——サスペンスを持続させること——に発したものだと考えられる。ポウがつねに「効果」を念頭に置きながらものを書いていた作家であることを忘れるべきでない（たとえば「詩作の哲学」“The Philosophy of Composition” [1846] を参照）。
- また、語り手の忘れっぽさ（「わずかな時間しかたっていないのに、ブランズビー博士の学校で起こったことの記憶は薄れてしまった」[438]、「じきにそのこと〔ウィルソンが語り手と同じ日にブランズビー校を退学したこと〕について考えるのはやめてしまった」[440]）も、つぎの事件に対する彼の反応をより激しいものにするための伏線だったろう。
- (10) 旧稿にて筆者は「ウィリアム・ウィルソン」という作品がアレゴリー以上のものである可能性を示唆した（70）が、にもかかわらず、以下の本文では、寓意的な読みを追究する試みが展開されることになるだろう。もちろんだからといって、筆者は、他の観点からなされる解釈の可能性を否定する者では依然としてない。ただし近年流行の、作品が書かれた当時の政治的・社会的コンテクストに注目するアプローチについては、どの程度までならそれを（他のポウの作品はともかく）「ウィリアム・ウィルソン」に適用することが妥当なのか、現時点では判断を下しかねている。この問題については、後日稿を改めて検討したい。
- (11) 結末で分身が口にするせりふについて、トドロフは、「この言葉は、十二分に寓意を明示していると思われる。ところが、この言葉は字義的なレベルにおいても意味をもちつづけている……。つまり、純粋な寓意とは言い切れない」と述べている（110）。
- (12) スチュアート・レヴァインは、ポウは語り手の精神的不安定を強調したり、場所を描くのに緩急使い分けるなど、たくみな技法を駆使したりすることによって、作品を“fantasy”と“factual narration”の中間に位置せしめるのに成功したと主張している（184-93）。この見解はトドロフの「幻想」の概念と一脈相通するものだ。またレヴァインは、ポウは分身の実在性を不問に付しているとも断言している——「ポウは〔ウィルソンが〕実在するか否か、決して言わないので、読者はその存在をいささか疑問視するにちがいない」（189）。G・R・トンプソンも似たようなことを述べている——「第2のウィルソンが……超自然の霊として存在するのか、それとも語り手の精神が作り出したものとして存在するのかは曖昧なままである……もっとも二重に読むための手がかりは念入りに置かれているのだが」（169）。かくして、彼らや前出ウェアは「ウィリアム・ウィルソン」の究極的な意味の構造的決定不能性を強調している。つまり構造上の理由により、「怪奇」のジャンルに属するとも「驚異」のジャンルに属するとも決めかねるというわけだ。それに対し、筆者の主張は、構造的には「驚異」のジャンルに収められるものの、それ以前にアレゴリーであることから、分身が実在するか否かといった問題は度外視されるというものである。
- (13) パトリック・F・クインは「ウィリアム・ウィルソン」を、「おのれの良心と争い、逃れ、最後に破滅的な勝利をもつ男の一人称の物語」と要約している（221）。ヴィンセント・ブラネリ（「ウィリアム・ウィルソンはおのれの良心を殺害することにより、1個の人格としての自分自身を破壊する」[72]）や、デイヴィッド・ケタラー（「語り手のあとを付きまとうウィリアム・ウィルソンは語り手の良心である。この望ましからぬ影を殺すことで、彼は自分自身を殺すのだ」[101]）の評言も、基本的にクインのと同一直線上にあると言ってよい。
- (14) 語り手は、ウィルソンの忠告に従っていたら、もっと善良でもっと幸せな人間になっていただ



るうに、といった趣旨のことを2箇所述べている(435, 445)。しかしこれは、主人公に反省のことは口を口にさせることによって作品の教訓色を明確に打ち出すためのものというよりは、むしろ分身が彼の良心つまり精神の一部であったことを読者に伝えようとする、作者からのメッセージだと考えられる。(ちなみに、語り手がウィルソンのふるまいに親愛の情や庇護者めいた雰囲気を感じ取ったエピソード[432]や、警戒心がゆるんだウィルソンの口調や様子に幼年時代の幻影や遠い昔に知りあいだったような印象を覚えたエピソード[436]も、ウィルソンの本質——もとは語り手と一心同体であったこと——を暗示する働きをしているにちがいない。)しかもあとのほうの箇所では、あたかも誤読を防ごうとするかのように、ポウは語り手に、いくら「苦い過ち」を犯させないようにするためであったとしても、「主体的行動という生得の権利」を否定させる言い訳にはならないと、感嘆符付きの強い口調で言わせている(445)。

- (15) ダニエル・ホフマンはつぎのように述べている——「ウィリアム・ウィルソンの分身が彼の良心だとするなら、分身はまた彼の天邪鬼でもある。つまり、2つに分裂した自我がそれぞれ自分の天邪鬼を抱えている——ウィルソン自身、第2のウィルソンにとっては天邪鬼なのだ」(213)。「ウィリアム・ウィルソン」に「天邪鬼」のテーマを見てとったホフマンの慧眼には敬意を払うが、しかし筆者は、良心と天邪鬼とは基本的に別物だと考える。
- (16) 天邪鬼の犠牲者である、「告げ口心臓」“The Tell-Tale Heart” (1843)、「黒猫」“The Black Cat” (1843)、「天邪鬼」“The Imp of the Perverse” (1845)といった作品の主人公兼語り手を、ポウが非難していると考えた読者は誰もいないだろう。

#### 引用文献

- Vincent Buranelli, *Edgar Allan Poe* (New Haven: College & University P, 1961)
- Daniel Hoffman, *Poe Poe Poe Poe Poe Poe Poe Poe* (1972; Baton Rouge: Louisiana State UP, 1998)
- Valentine C. Hubbs, “The Struggle of the Wills in Poe’s ‘William Wilson.’” *Studies in American Fiction* 11.1 (1983): 73–79
- David Ketterer, *The Rationale of Deception in Poe* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1979)
- Stuart Levine, *Edgar Poe: Seer and Craftsman* (DeLand, FL: Everett/Edwards, 1972)
- Thomas Ollive Mabbott (ed.), *Collected Works of Edgar Allan Poe*. 3 vols. (Cambridge, MA: Belknap P of Harvard UP, 1978)
- Patrick F. Quinn, *The French Face of Edgar Poe* (Carbondale: Southern Illinois U, 1957)
- Floyd Stovall, *Edgar Poe the Poet: Essays New and Old on the Man and His Work* (Charlottesville: UP of Virginia, 1969)
- Ruth Sullivan, “William Wilson’s Double.” *Studies in Romanticism* 15 (1976): 253–63
- G. R. Thompson (ed.), *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews* (New York: Literary Classics of the United States, 1984)
- G. R. Thompson, *Poe’s Fiction: Romantic Irony in the Gothic Tales* (Madison: U of Wisconsin P, 1973)
- Tracy Ware, “The Two Stories of ‘William Wilson.’” *Studies in Short Fiction* 26 (1989): 43–48
- ツヴェタン・トドロフ (三好郁朗訳) 『幻想文学論序説』(東京創元社, 1999年)
- 平野幸彦「アレゴリストはなぜアレゴリーを批判するのか——エドガー・アラン・ポウの『怪奇ものの』を読むために」『新潟大学言語文化研究』7号(2001年)61–72頁